

戦時中の

幼稚園

村石京子

新年になって早々に新庄先生がお逝きになられました。私の生涯の中で生まれてはじめてはいった社会である幼稚園の中で、二年間暖かく育くんで下さった先生がご他界になられたことは、とても寂しく悲しい思いでございます。新庄先生は大正六年に女高師の文科第一部をご卒業になられて後、大正十年から母校の附属幼稚園の教諭として昭和十四年までご在職になられました。

私が園児であったのは昭和十一年四月から十三年三月までの二年間であり、川の組（四歳）から海の組（五歳）の卒業のときまでずっと新庄先生に受け持っていたきました。そのことは、小学校のときのことにように順序をへて思い出せるものではありませんが切れ切りの記憶の中から少しづつひろってみたいと思います。

幼稚園のころ何をしてあそんだかというところで一番印象にあるのは戦争ごっこです。おりしも支那事変の最中であり、アルバムの中にも国旗掲揚とか、旗行列などが記念に残されている時代であり、国中が戦争意欲旺盛のこととて、子どもたちのあそびも戦争ごっこというのが毎日行なわれていました。男の子たちはクラスの中で敵味方と二軍にわかれて戦ったり、仮想敵陣を設けてそこへ攻めこんだりして

いたようです。そして私たちはいつも従軍看護婦でした。ときどき鬼ごっことかさくらさくらしまししょうなどと他のおそびが出てきても、一番ながつづきましたのは戦争ごっこであったようです。看護婦さんは腕に先生につくっていただいた腕章をはめてかいがいしく負傷兵を看護するのです。

そのころ南京陥落などもあって町中ちようちん行列でわいていたようです。同級に現在日本画家として活躍している友だちがいますが、その人は梅檀は双葉よりかんばしのたとえどおり、小さいころから画才があり、彼女のかわちちようちん行列の絵が、白地に紺と赤でいろどられた手ぬぐいとして出来上がったとき、ずいぶん素敵だと子ども心にも感嘆したものです。現在も附属幼稚園で運動会の参加賞などに子どものかいた絵をふきんなどに染めてい

ますが、あのころからこういった流れが続いているのかとおもしろく思うこともあります。

あのころはときどき目新しい材料として、もみじやいちよの葉などにえのぐをブラシで吹きつけて型をとったりしてあそびましたが、その思いがけない美しさにも目を見る思いでした。また粘土細工では、当時は竹べらなども使っていました、あの粘土の感触が大好きで、とても興味ある材料だったことは今の園児と全く共通しております。

それにしても、幼稚園の庭というのは何という魅力的なものだったことでしょう。今もほとんど当時と変わらぬ姿で子どもたちを迎えておりますが、私が幼かったときはあれほど親しみ深かったにもかかわらず、園の庭の全景というものはとても広くてとらえるこ

とは出来ませんでした。ただ四季おりりの手入れのゆきとどいた広い庭が、部分々々として心の中に残っています。

六月になるときれいな紫の花の咲く藤棚があって、そのころは大きな藤豆がたくさん、ぶら下がりました。もちろんとってはいけないことも知っているし、手もとどきませんでしたので、どこかに一つでも落ちていようものなら宝物でも見つけたようにうれしかったものです。それからいつも水の満ちている池やバラの家なども大好きでした。そしてそのころも大きないちよの木と山があったのですが、そこまで行くのは私にはとても遠出に思われて勇気がいりました。今の子どもたちはあのころよりずっと活発であるし、成長も早いので一人でも山まで出かけますが、あのころを思い出すと何だか不思議なような気がします。でも今でも「先生、

お山へ行こう」といって手をしっかりとにぎりしめながら山へ行く道を登る子どもや、また私がついてくるかなとふりかえって確めながら歩いていく三歳児の姿には、あのころの自分をふと思い出させるものがあります。

幼稚園の庭であそんでいたころのことは、何かふわっとかすんでしまうことも多いのですが、はっきり思い出しきれないだけにとても楽しかったこととして残されています。そして現在も附属幼稚園では、出来るだけ自分たちの活動を主体として自由のびのびとあそぶようにと進めています、この流れの源はあの当時からつながっているのだと思います。それだからこそ、幼稚園のころのことを思うと何かみち足りた思いがよみがえってくるのです。よう。

こうした毎日の中で新庄先生は、い

つものにこやかに私たちを迎えてくださいました。そのころはお着物にはかまをきちんと召しておられた美しい先生でした。けれど私は性来人見しりが強い上に、女の子の中では二月末生まれの一番ちびだったせいか、いつまでもなれないで母の着物の袖をぎゅっとなぎっていたようです。そのせいか、今でも園になれにくい子どもがいると何だかその気がわかるようで同情してしまいます。しかしそのうちにだんだんと目がたつと元気が出てきました。現在は男女ほぼ同数で三十五人の編成ですが、当時の一部では男子二〇人、女子一〇人の級でした。それで当然男の子ともあそぶようになります。なかでも私は兄がいたせいか仲のよかったのは男の子仲間であつたようで、あまりへやにもよりつかないで終日どこかであそび暮していたようです。

そのころは、女高師には四年毎に皇后陛下の行啓がありました。そして附属にもおいでになるので、その折の先生方の御心づかいはとても大へんなことだつたと思います。頂度在園中に行啓にめぐりあわせた年でしたから、きっと私などもお行儀よくしていられるかどうかとご心痛をおかけしたことでしょう。

はからずも附属幼稚園で新庄先生の後を歩むようになりましたので、私は園で時々お目にかかつておりましたが、そうした最近の先生よりも、今私の中にいらつしやる新庄先生は、やはり私の幼児だった時代に、きちんとはかまを召されたりりしいお姿の新庄先生なのです。たくさんの楽しい幼稚園生活を過ごさせていただいたことを改めて御礼申し上げるとともに、心からご冥福をお祈り申し上げたいと思います。

幼児の教育 第七十一巻

五月号 定価一〇〇円

昭和四十七年四月二十五日印刷
昭和四十七年五月 一 日発行

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

編集兼 津 守 真
発行者

112 東京都文京区大塚二ノ一ノ一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村一ノ一一

印刷所 凸版印刷株式会社

111 東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館 にお願ひいたします